

『待ち望む心があれば』 ヨハネ7:32-36

7:32 群衆がイエスについてこのよううわさをしているのを、パリサイ人たちは耳にした。そこで、祭司長たちやパリサイ人たちは、イエスを捕えようとして、下役どもをつかわした。

7:33 イエスは言われた、「今しばらくの間、わたしはあなたがたと一緒にいて、それから、わたしをおつかわしになったかたのみもとに行く。

7:34 あなたがたはわたしを捜すであろうが、見つけることはできない。そしてわたしのいる所に、あなたがたは来ることができない」。

7:35 そこでユダヤ人たちは互に言った、「わたしたちが見つけることができないというのは、どこへ行こうとしているのだろう。ギリシヤ人の中に離散している人たちのところにも行って、ギリシヤ人を教えようというのだろうか。

7:36 また、『わたしを捜すが、見つけることはできない。そしてわたしのいる所には来ることができないだろう』と言ったその言葉は、どういう意味だろう」。

●序論

今日は、アドベント（待降節）の第二主日として礼拝をささげています。

ただ元々アドベントとは到来という意味で、キリストの初臨（つまりクリスマス）と再臨の両方に使われるということです。すなわち、かつてこの世の救いのために人となった主イエス・キリストを待ち臨む時を思うと同時に、歴史の審判者としてやがて来りたもう再臨のキリストを待望する時でもあるのです。

ヨハネは、イエスさまが語った言葉をめぐって、信じようとする人と、拒絶する人を見せています。神さまがイエスさまをお遣わしになった目的は明らかです。

3:17 神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。

一方で、このイエスさまを信じるか信じないかで人は神さまに対する自分の態度を決めているのだとも語ります。

3:18 彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。

神の御子イエスさまは人を救うために、あえて人となられて来られたという事実。それゆえ拒絶されることの中での深い悲しみを覚えておられたことも気づかされるのです。

1:11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。

●本論

I. イエスを拒む人々

7:32 群衆がイエスについてこのよううわさをしているのを、パリサイ人たちは耳にした。そこで、祭司長たちやパリサイ人たちは、イエスを捕えようとして、下役どもをつかわした。

「このよううわさ」とある内容は前節にあります。

7:31 しかし、群衆の中の多くの者が、イエスを信じて言った、「キリストがき

ても、この人が行ったよりも多くのしるしを行うだろうか」。

仮庵の祭りの後半、その宮のうちでイエスさまが立ち上がってお教えになったことで起こった人々の反応やうわさが、パリサイ人たちの耳にするとところとなって、彼らの行動はイエスを捕らえるために兵を遣わしたということでした。

一言で言うと、本当の意味でイエスを待ち望んではいなかった人々の反応です。

待ち望んで救いを見いだすはずの心は、別のものでおおわれていました。

イエスさまを巡ってのうわさを立てて話のネタにすることだけで終わる。

また中にはこのイエスさまの言葉を聞いて敵意をつのらせる人。

そのありさまを自分たちの知識と理解中で評価・判断しようとする人もいました。

この一連のくだりで、だれも聖書（旧約・律法と預言の書）に照らしてこのイエスさまの言葉を吟味したような内容が記されていないことは残念です。

そうなる理由の一つが、彼らはイエスさまの地上における素性のすべてを知っていると、ひとりよがりな確信をもって、イエスさまを評価していたところにありました。

「教えられやすい人になる」ということは、何でもうのみにすることではありません。

使徒17:11-12 ここにいるユダヤ人はテサロニケの者たちよりも素直であって、心から教を受け入れ、果してそのとおりかどうかを知ろうとして、日々聖書を調べていた。そういうわけで、彼らのうちの多くの者が信者になった。

うわさや偏った知識や評価を避けて、主の言葉を求めましょう。

わたしたちの心をすなおにしてくださいませましょう。日々聖書に耳を傾けることです。

Ⅱ. イエスを見いだした人々

アドベントということで、救い主の誕生を巡って、イエスさまを見いだした人たちの姿が幾人か描かれています。それは待ち望み、そして見いだした人たちでした。

今日の週報記事。東の博士たちが、星に導かれてエルサレムまでやってきました。

マタイ2:2 「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。

わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」。

ここで教えられる事のひとつは、イエスに会いたいとひたすら願う者、メシヤを待望する者に、神は非常手段を用いてでも、その人を導いてくださるということでした。

またルカには宮において、救い主を待ち望んできた人たちが描かれています。

ルカ2:25 その時、エルサレムにシメオンという名の人があった。この人は正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。また聖霊が彼に宿っていた。

シメオンは幼子を抱き神をほめたたえた、「わたしの目が今あなたの救を見た」とも記されています。待ち望んでいた彼を聖霊が導いたとあるのです。

さらに、年老いたやもめの女性アンナが、この幼子イエスを見いだしました。

ルカ2:37-38

:37 その後やもめぐらしをし、八十四歳になっていた。そして宮を離れずに夜も昼も断食と祈とをもって神に仕えていた。

:38 この老女も、ちょうどそのとき近寄ってきて、神に感謝をささげ、そしてこの幼な子のことを、エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りきかせた。

年齢を重ねてなお、その心はへりくだり素直であった。だから祈りの中で御言葉を聞いて、そして幼子を見いだして、なお素直に主をほめたたえることができた。その姿に、まさに「教えられやすい人」のありさまを見ることができます。

心から主を待ち望む人に、神さまは聖霊により、御言葉を通して私たちに気づきと導きを与えて下さることを覚えましょう。

Ⅲ. 再臨を待ち望む人

アドベントという言葉は「再臨」を待ち望む意味も含まれています。

先に述べたように、このイエスが地に来られたことを気づくことも、見出すこともせず、また拒絶する人たちも起こったからこそ、待ち望む心を大切にします。

一方で、わたしたちが当時の人たちと同じように、イエス・キリストの再臨待ち望む心を持つことがチャレンジされていることを覚えたいのです。

それは、わたしたちがイエス・キリストをわたしの救い主として信じたから。信じてキリストが再び来られることを聞いて信じているからです。

聖書に戻って、イエスさまの言葉にはこうあります。

7:34 あなたがたはわたしを捜すであろうが、見つけることはできない。そしてわたしのいる所に、あなたがたは来ることができない」。

「あなたがたは」とあるのは、イエスさまを信じない人、信じようとしらない人たちのことです。彼らの応答は「何を言っているのかわからない」というものでした。

7:35-36 そこでユダヤ人たちは互に言った、「わたしたちが見つけることができないというのは、どこへ行こうとしているのだろう。…また、『わたしを捜すが、見つけることはできない。そしてわたしのいる所には来ることができないだろう』と言ったその言葉は、どういう意味だろう」。

マタイの福音書で、花婿を待つ十人のおとめのお話。十人とも花婿を待つ用意していたはずでしたが。

マタイ25:2-3 その中の五人は思慮が浅く、五人は思慮深い者であった。思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった。

結果、花婿が来た時に、5人は婚宴の部屋に入り、他の5人はそれがかなわなかった…ということです。

このたとえば、再び来られるイエスさまを待ち望む人の姿を描きます。

待ち望み、そしてふさわしい備えをするかどうかで、時が来て、迎えられて共に御国の祝福にあずかることができるかどうか左右される…ということです。

イエスさまの誕生以前のことに心を向けてみましょう。

救い主キリストが地に来られることを人々は少なからず知っていました。

それを教えるパリサイ人たち…などもいました。

しかし、彼らはいざ、イエスさまが救い主として地に来られた時、その心をかたくなにし、教えられることを拒み、そして十字架でイエスを殺すことへと向かったのです。

彼らは救いを必要としていたのではなく、自分の正しさを認めてくれる神を求めていた…ということです。

わたしたちは、自分の罪を知り、赦しを必要としている者であることに気づくことが大切です。そして「主よ憐れみを感謝します」と祈ることができる者とされていることを覚えることです。イエスさまの十字架が必要だとわかる人でありたい。

聖書はこう語ります。

「きょう、み声を聞いたなら、神にそむいた時のように、あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない」。(ヘブル3:15)

●さいごに

「待ち望む心があれば」と題してお話しています。

イエスさまは、あまりにも多くの人たちに拒まれた。

だからイエスさまはあのように言われた

「あなたがたはわたしを捜すであろうが、見つけることはできない。そしてわたしのいる所に、あなたがたは来ることができない」と。

その厳しく聞こえる言葉にキリストの痛みと悲しみを想像することは大切なことです。

神の思い、御子の思いにしっかり心を向けることです。

3:16-17 神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。

この神の愛に心を重ね、また再臨の約束も心から待ち望むとき、わたしたちはこの世と、わたしたちの周囲の人々の救いのために祈らないではられません。

本気で、主の再臨を待ち望む心をもって、ゆだねられた福音宣教の働きのため祈る者でありたいと心から願います。